

大熊 信行

カーライルの自由主義批判

—『衣服哲學』外二篇について

カーライルの自由主義批判

——『サーター』外二篇について

大 熊 信 行

こゝに發表するのは今から約二十年前わたしが學生時代に書いた研究論文の一部分であつて、くはしくいへば、小著『社會思想家としてのラスキンとモリス』に收めてある二三の論文と前後して書かれたものである。同書の卷末記にも述べてあるやうに、カーライルはわたしの研究題目のうち最も心を惹きつけたものであるにもかゝらず、むしろそれがために論文にまとめあげることが却て困難であつた。すくなくともこゝに發表するものはわたしが右の小著のなかに敢て收める勇氣のなかつた大部分であることは事實である。

しかるに、内外の種々な事情は最近わたしをふたゝびカーライルへ引きもどさなければやまないものがあるので、まづ二十年前の舊稿の一つの拾石としてこゝに發表し、さらに近い將來においてカーライル論一篇の筆を執りたいとおもふのである。

私事にわたつて恐縮であるが、わたしは青年のころ國木田獨歩の『牛肉と馬鈴薯』から『岡本の手帳』に移り、それによつてカーライルを知つた。カーライルを通してさらにゲーテを知つた。『ゲーテとカーライルの通信』の翻譯を志し、その一部を某誌に連載したのは卒業直後であつた。しかしわたしのカーライルにた

いする最大の興味は、近代思想——殊に近代の合理主義・自由主義・功利主義にたいする批判者としての側面である。幸にこゝに發表するものはかれのその側面の本質を或程度まで明かにしてゐるので、これを讀みかへしてゐることはわたし自身にとつてすこぶる有益であつた。讀者にとつてもなんらかの参考となればこれに過ぐるものはない。

舊稿の表題は『サター・レザータス外二篇の梗概』とあり、三章六節から成つてゐたのであるが、こゝには目次を廢し右のやうな新表題を用ゐることにした。讀者に本稿の内容をつたへるに便利だらうとおもつたからである。發表に際しても辭句の修正にとゞめ、文章のぬきさは見あはせた。たゞ一ヶ處七行ばかり削除したところと、七行ばかり添加したところとがある。辭句の修正は全面的にこゝろみたが、しかし或種の漢字を假名に改めたのと、文語調の個所を口語調にかへたのとが添削の大部分である。引用箇處の脚註は一切廢除した。

カーライルにたいするわたしの『個人的な』傾倒はこゝではすこしもあらはれてゐないかもしれない。必要以上に表面上冷靜を裝ふことが學問的態度であると信じてゐたやうな時代の作品だからである。ラスキンやモリスに關する文章でもそのことはおなじであつた。

I

宇宙萬物をもつて神秘なる神の象徴と觀じ、人類を神の顯現のなかの最高にして最も偉大なものとなし、生れながら神の意志を體し、萬人を統一指導する能力と使命を帯びた英雄がその中にをり、萬人はかれに服従することにおいて生存の意義と幸福とを見いだすべきものである。これがトーマス・カーライルの根本思想なのである。

かれの政治、經濟および社會に關する評論も、時事にたいする激烈な論難も、當時のイギリス論壇における一異色であつたのであるが、いづれとして右の思想の發現でないものはなかつたといふも妨げない。その思想の淵源を釋ねることはしばらくおき、こゝにはそのやうなかれの思想的性格を窺ふに最も適當なものとして、まづ三四歳前後の小論文『時代の徴候』(“Signs of the Times”)を擧げてみた。

『時代の徴候』は後述するカーライルの代表作『衣服哲學』の執筆にさきだち、一八二九年、エデンバラ評論誌上に掲載されたものである。かれは同論文で當代におけるメカニズムの餘弊を論じ、時代の趨向がつひに精神主義に推移せずしてはやむべからざるゆゑを説いた。同論文の特色といふべきは、後年のかれの行論に見るやうな發作的直覺的な叫喚や皮肉痛罵の毒舌によらず、行文に多少の秩序と發展とが示され、平靜且つ率直に、しかもたしかにかれの生涯にわたる根本思想の諸特徴を披瀝したものであるといふ點である。ある局部的な癡癡や誤解や偏執を免れざるにもせよ、かれが歴史及び社會にたいして異様に深い洞觀をもつてゐたことは否定すべからざるところとおもふ。その洞觀にしてかほどに明徹であるかぎり、社會と時勢とにたいする性急な論難の聲は出さうもない道理であるに、事實はいたく反對であつて、かれの評論は年を経るにしたがひよく毒語癖をくはへ、焦躁の調を帯びていつたもののやうである。してみるとかれをして靜かな觀照的態度にとゞまるをゆるさぬ別個の力がかれの中にもかれの外にもあつたのだといはなければならぬ。前者はかれの生得の、またおそらく幼時の家庭における感化から來たところの異常な道德感情であり、後者はイギリス當時の異常な政治的社會的狀態であつたといはねばならぬ。

カーライルにとつては自然および歴史が因果の法則をもつて説明されうべしとは思ひもよらぬことであつた。

よしそれによつて説明されうべしとしても、すくなくともかれにとつてそれは満足な説明とはなり得なかつた。かれにとつて唯一にして最高の關心事は、自然にたいして『そは何か?』と問ふことであつた。すなはち實在そのものの意義を問ふことであつた。さらに突きつめていへば、實在そのものに意義ありとの絶對の豫想をもつてその意義を問ふことであつた。そしてかれはこの問題になんらの解答もあたへられないので、宇宙人生の意義を否定すべからず肯定すべからざる混沌に入るべきであつた。しかしながら意義なしとするも、ありやなしや不明なりとするも、ともに混沌であり無秩序であるからして、最後の一つである意義ありとするに據るのでなければ、生活は不可能とならざるをえぬ。生活を不可能なりと決定することは人間本性の背んぜざるところであるからして、意義ありとの『信仰』を呼びさまざるをえなかつた。かれの評論に宗教的な神秘的な色のつよい用語が著しく多く用ゐられながら、眞にかれの『信仰』となつてゐるものの窮極をたづねれば、人間が有しうる信仰の最小極限のものであるやうに見える。すなはち宇宙の運行と歴史の發展とは測るべからざる力の發現であつて、人智をもつて臆測すべからざるものであるが、しかしそれは目的なきものにはあらずといふ信仰である。

つぎに思想家としてのカーライルの著しい特徴である神秘主義は、主として『驚嘆』の讚美にある。かれのいはゆる『驚嘆』とは、不可思議との對質、絶對に對する感動であるが、認識が假相を貫いて實相に至る過程、——純粹直觀である。かれの見るところによれば、それは宗教の起原、崇拜の根柢、哲學への第一門であり、覺醒であり、甦生であり、人間の眞の進歩の階段である。さうして人智をもつてしては臆測すべからざる自然の秘密が、驚嘆と靈感を通して忽然人間の精神のなかに開明されるといふ主張となるのであるから、宇宙人生にたいする最小極限の信仰であつたものが、忽ちにして最大極限にまで轉化したかのやうな觀をあたへる。

つぎにカーライルの根本的な稟性といふべきは、外來的、後天的、形式的、組織的、機械的なるものを排除してなほかつ考へうべき生命の本質、すなはち人智の觸るべからざる神秘的發現力、自然の賦與したる本能あるひは衝動を凝視してやまない傾向である。かれの見るところによれば自然はつまるところ大いなる潮流であり、時として個人（天才・英雄）を貫いてあらはれるその力には量るべからざるものがあり、制度、組織および理論は、それらのためになんら加へるところがないのみか、かへつて破壊され、引抜はれて消えうせるほかはない。およそ機械的裝置を工夫し形成しようとするのはいつの世でも弱者の業である。英雄すなはち天才は神の意力の高度の發現であると觀ぜられるかぎり、自然すなはち神にたいする驚嘆畏敬の念が、直ちに轉じて英雄におよぶべきは當然であり、また自然の意力が絶對にして量るべからざるものであるかぎり、英雄の行爲もまた絶對にして量るべからず、これを論ずるに正不正をもつてすべき標準のないのは當然である。さればつねにカーライルの口に親しい『道徳』といふやうなものも、その一定の意義といふがごときは規定しがたいものである。

自然および歴史をこのやうに觀じきたれば、人間生存の目的は各人の意志より獨立してすでに當初から決定したものであつて、各人が欲するまゝにこれを創出するといふやうなことは考へられないのである。その目的とは唯一人の英雄の指導のもとに絶對に服従することにほかならぬのであるから、もし人間にゆるされた『自由』ありとしても、たゞ無限の服従のなかに存するのみ。すなはち殊更に『自由』と名づけることがかしいやうなものではあるが、政治的自由が殆ど人生窮竟の目標であるかのやうに渴望されてゐた時代の趨勢にたいし、別に眞の『自由』ありと稱して對舉したものであらう。かれは他方において各人に睡れる神性があるとす。何人といへどなにほどか英雄的ならざるはないとする。英雄を認知しうるは英雄のみ。すくなくともなにほどか英雄らしい

分子のない者は英雄の英雄たるゆゑんを認知することができぬとする。萬人をして悉く英雄たらしめようとの願望は、同時に萬人ごとく英雄たるにいたるべしといふ預言ともなる。

カーライルの題目は直接に個人であつて社會關係ではない。かれの見るところによれば、歴史はとりも直さず英雄傳の系列のごとくである。個人の内部なる天賦の力および畢竟それと別種のものでないと見るところの個人の意志から出立して社會を見る。だから無數の外部的條件の交叉點に個人の行動が生じたものとは觀ないで、飽くまでも個人の能力または意力の發現が時空を貫いて社會に遠く波及するものと見る。數百年ないし數千年前の或個人の行爲はなほ今日の社會にその延長線を辿りうるとする。このやうに個人を原動力とする見解は社會を主とした考察に餘地をあたへない。社會の調和は社會の統一から來るより外はなく、社會の進歩は個人の進歩の總計よりほかのものでないといふことになる。社會關係の改造は畢竟機械的條件の改造であるからして、かれにとつて第二義である。人類の運命は宇宙の運行とひとしく『多數』の意見によつて左右することはできぬ。で、願はくは各個人をしてかれ自身のうへに自ら行ひ、みづから果しうるところのものを成し遂げしめよといふことになる。

カーライルの初期の論文の一つである『時代の徴候』が、かれの生涯にわたる思想の諸特徴を披瀝したものであることは冒頭に述べたが、以上をもつてかれが大體いかなる種類の思想家であるかを豫め知ることができたとおもふから、これから同論文の梗概を述べてみたい。

II

『時代の徴候』は、十九世紀をメカニズム全盛の時代と見たカーライルが、機械的原則のうへに立てられた科

學・哲學および政治學を痛撃し、自然および個人を通して現れるその力の無限と神秘とを高調して、やゝもすれば個人の努力にたいする信仰の薄れゆかうとする趨勢と抗争しようとする試みたもの、つぎはその梗概である。

(1) 時代のメカニズム —— 『もしわれわれの時代の特性を何か唯一つの語句をもつていひ表すとしたならば、これを英雄的、信仰的、哲學的または道德的時代と呼ばないで、なによりまづ機械的時代とよぼう。その語のあらゆる外的および内的意義において、これは機械の時代である。』かゝる時代においてはたゞに外部的・物質的の事物のみならず、内部的・精神的な事物にいたるまで、機械的に處理されるにいたり、ために人間は頭腦も精神もともに機械的となり、外部の制度や組織にたいして人生の希望をつなぎ、内部の完成のために努力することを忘れてゐるのである。

メカニズムにたいする信仰があらゆる方面にあらはれてゐることは哲學を見てもわかる。形而上學さへロックの時代からあとは機械的となつてゐる。『それは精神の哲學ではなくて、意識あるひは觀念などと呼ばれるものの起原に關する單なる論議である。すなはちわれわれの精神の中に、見るものの發生史である。必然と自由意志とか、精神の物質にたいする不可缺または非不可缺の依屬とか、あるひは時間と空間、神および宇宙とわれわれとの關係とかの大きいなる秘密は、これらの考究では一寸も觸れられてはをらず、それらと些かの關係があるともみえぬ。』今日においては徳の無限絶對なる性質は有限且つ條件附のものとなり、もはや美と善との崇拜ではなくて、利益の計算に過ぎないものとなつてゐる。およそいかなる意味においても崇拜といふべきものは認められず、たゞ苦痛の恐怖、快樂の希望といふことで機械的に説明されて濟んでゐる。知り且つ信ずる力たる知力インテリゲンツは殆ど論理と同義となり、その方法は臆想でなくて論證である。原因結果は自然を觀るときの殆ど唯一の範疇である。『如何な

るものにあつても第一の問題は「それは何か」ではなくて「それは如何にしてあるか」といふのである。『哲學者はなんらの愛憎を有せず、何をなすでもなく、何を造るでもなく、たゞ爲されたる或は造られたるすべての物の原因結果を碾きだすところの論理水車 Logic-mill の一種にすぎない。かれの眼にはおよそ靜に運轉してゐるものはすべてよいのである。さうしてイグナチウス・ロヨラもウィックリフもたゞ單に何かの原因による或は何かの原因となる機械的現象にすぎないといふことになる。畢竟、内部の世界が何かあるとしても、それに入る道は外部を通じてゆくより外はないといふことになり、『機械的に研究し且つ理解されえないものは、研究されることも理解されることも全くできないものである』といふことになつた。

メカニズムにたいする信仰の最も著しくあらはれたものは政治學である。政府は社會の機關と名づけられ、すべての私的機關が由來すべき本原の大車輪のごとくにいはれてゐる。かくて政治は決して機械的に處理しえざるものであるといふ認識が失はれやうとしてゐる。現代の哲學者はソクラテスやプラトーンではなくてミスやベトナムである。前者が『道徳的善の必要および無限の價值』を教へ、人間の幸福は外部の事情に依らずして内なる精神に依るといふ大眞理を説いたのに反して、後者は人間の幸福は全然外部の事情に依り、精神の力と品位とはともに境遇の產物であると教へるのである。だからしてわれわれの問題となるは、人民の内面的すなはち道徳的宗教的『精神的狀態ではなくて、外面的すなはち有形的』實際的『經濟的狀態である。かうして Body-Politic はこれまでになく崇拜され且つ提供されてゐるが、Soul-Politic はこれまでになく缺乏してゐるのである。今日の政治は不満者にとつては『課税機關』であり、満足者にとつては『財産保障機關』たるにすぎない。

(2) ダイナミックス——『少し學者らしくいへば、人間の運命及び性質に關してはメカニックス Mechanics

の科學と共にダイナミックス Dynamics の科學があるのだ。』後者は愛、恐怖、驚嘆、熱誠、詩、宗教等、およそ infinite な性質を有する人間の力の神秘なる源泉をとりあつかふ科學であり、前者はそれらが報酬の希望あるひは刑罰の恐怖といふやうな直接の『動機』の形をとつたときに、それらの有限なる發展を實際に研究する科學である。往時、道德家・詩人、あるひは僧として現れたところの賢人はメカニカルな職分を等閑視することなく、しかも主としてダイナミカルな職分に携はつて、『人間の内部なる本原の力』を規定し純化するに努めながら、その點に『主たる困難があり、またかれらが企てうる最善の奉仕がある』ものと思つてゐた。しかるに今日政治哲學者として現はれる賢人はメカニカルな職分に没頭して人間の動機を評價計量し、損益の安排によつて人間を眞の利益に導かうとしてゐる。けれども『それらの動機は實に無數で、しかも各個人において異なるのであるから、かれらの決算から眞に有益な結論が出てくることができない。』社會的および道德的見解においてメカニズムが大いになすところありとしても、少くともそれが人類の『價值あるひは幸福の主たる源泉』であるとは承認できない。試みに人間の生活を現在の高さにまで高揚せしめてゐるところの人生の快樂、學識および所産の大いなる要素を考察し、それらのいかなる部分が制度やその他のメカニズムに負うてゐるか、またいかなる部分が自然によつてあたへられた人間の本能的にして無際限な力に負うてゐるかを見るがよい。

科學は主として大學の創立者に負うてゐるのではなくて、自然が地上に送つた天才者の小部屋の中に起り且つ發展したものである。ホーマアやシェクスピアは組合やその他の制度の產物ではない。要するに『科學と藝術とは終始變ることなく自然の自由な賜物であつた。』『それらはすべて人間のダイナミカルの性質に起原し、メカニカルの性質に起原したものではない。』最も偉大な實例は基督教の場合である。そもそも基督教が海を越えて諸

國に擴まつたのは、メカニズムの制度や組織の建設によつたのではなくて、『人間の精神の神秘なる深み』のなかから生じ、言葉の說法や個々人の努力によつて『心から心へと聖火の如く』飛び移つていつたものであり、すなはち『人間最高の到達はメカニカルならずダイナミカルに完成されたのである。』たゞに最高の到達のみならず、人類のあひだにあまねく波及せるすべての運動は他の方法によつて完成されたことは曾てない。十字軍・宗教改革・英吉利革命・佛蘭西革命のごとき、いづれも『見えざる』『無限なる』『神秘なる』もののための奮闘であつて、損益打算はその重なる動因ではなかつた。あらゆる時代において、人間は意識的にあるひは無意識に Celestial bright を要求し、自然はその『驚嘆すべき、疑ふべからざる進路』を進みつゝある。されば體系だの理論だのといふものは自然が時々刻々築いては洗ひ去る泡沫砂塵にすぎない。人類が内面的な、ダイナミカルな方面のみに偏すればつひに怠惰におちいり、空想的になる虞れはあるが、しかしあまりに外形的の養成に傾けば一時は多くの利益があるとしても、結局に至つては『總ての力の親たる道徳の力』を破壊し、その有害の度はさらに甚しく現代見るがごとき有様となるのである。

(3) 英雄および弱者 —— 人間の偉業と見えるものは悉く『當時の事情』の然らしめたところであるとし、あらゆる事をおこなふものは『事情の力』であり、一個の人間の力は何事をなしうるものでもないといふのは、個の精神が個々の身體とおなじく平等に對立してゐるものだといふ一つの假定のうへに立つてゐるのである。そこで『二つか、多くて十も集まれば小さな精神も一つの大なる精神より強くなる。』といふことになるが、これは明かに無稽のことだ。人間の精神は決してそのやうな對立をなすものではなくて、『一段高き智慧^{wisdom}すなはちこれ

までかれの中にあつて知られざりし精神的眞理を得たところの一人は、これをもたざる十人よりも十萬人よりも、

いな、これをもたざるすべての人よりも強い。』そして『全く精氣のごとく、天使にも似たる力』をもつて萬人のうへに立つ。

要するに外形的事物をもつて重要なもののすべてであるとなすところのメカニズムの信仰は、實は『あらゆる時代における弱者と、譯のわからぬ不平家の——人間の眞の善はみづからの内にあらずして外にありと信ずるすべての者の、通常の避難所である。』

(4) 豫想、信仰および行爲——以上いろいろ述べては來たが、われわれは社會の運命に絶望はしないで、人類の不朽なる威嚴を信じ、人類が命じられた高き職分を信じる。現代といへども逆行しつゝあるのではなく、不安不満のなかにも前途の希望を包藏して前進しつゝあるのである。われわれの精神的病疾といふのも實は輿論 Opinion の疾患にすぎない。われわれはすでに徴候を見る。メカニズムはいつまでもわれわれを支配するものではなく、他日『柔和にして萬事に立働く下僕』となるであらう。新らしく光輝ある精神的時代はおもむろに萬人にむかつて進みきたりつゝある。『最も暗き時は最も夜明に近きなり』とは賢明な諺である。いまや諸國民中の思想家は變革を要求してゐる。『社會のなかには深く横たはる苦闘がある。佛蘭西革命は……この強大な運動の親ではなくて子であつた。それら二個のたがひに抗争する勢力はつねに人事のなかに存在し、その絶えざる交通によつて兩者の健康と安全とを維持するのであるが、すでに久しきにわたつて分離せる集團となつて累積してきたので、佛蘭西革命はたゞその最も激しい爆發の舞台たりしのみ、終局の結果はその國においては遂げられなかつた。いな、いづれの國においてもいまだそれは遂げられてはゐない。政治的自由はこれまでそれらの努力の目的であつた。しかしそれらはそこに止まらず、また止まることをえないであらう。人間が幽かながらめざすものは、

おなじ仲間の壓制からのがれるといふだけの單なる自由よりは一段高き自由の方へむかつてゐる。人間のすべての高尚なる制度、忠誠なる努力、最高なる達成は、たゞこの一層高い至尊の自由（そは人間の正當なる奉仕）の形態であり、またいよいよ深刻なる記號たるにほかならぬ。』

『全體から見れば、この驚嘆すべき惑星の地球がその同類とともに無限の空間を運行しつゝあるがごとく、その上に載れる驚嘆すべき運命もまたわれわれがなしうるより遙かに高貴な指揮のもとに無限の時間を運行しつゝある。天文學者の教へるところによれば、今のところ地球の行路は肉體力（Physical Power）の星座であるハアキエリーズ指してむかつてゐるといふが、これは一番氣になることではない。それがいづれへむかつて進むにせよ、深智なる天はその周圍にあるであらう。ねがはくはわれわれをしてそこに希望および確乎たる信仰をもたしめよ。世界を改革すること、國民を改革することは、賢人の企圖せざるところであらう。愚かなる者をのぞいてすべての人は、たとひ遙に遅々たる改革なりとはいへ、唯一の本質的な改革は各人が自己のうへにはじめ、さうして自己のうへに完成したものであるといふことを知る。』

かくして『時代の徴候』といふ評論は結末をつけるのであるが、その冒頭の一節をこゝに繋げば、カーライルの論旨は最も明瞭となるであらう。いはく『國民にもせよ、個人にもせよ、あまりに預言を事とするのは非常によい徴候ではない。幸福な人間は現在でいつぱいになつてゐる。けだしその恩恵がかれらを満足せしめるからである。そして賢人もまた然り、けだしその義務がかれらを羈束するからである。われわれの大いなる職分はまさに遠く幽かに存在するものを見ることではなくて、眼前に明かに存在することを爲すにある。』

III

當時英國の讀者に獨逸文學の紹介者として知られたトーマス・カーライルは、一八三一年にその宿望たる獨創的作品を成就したのであるが、奔走の甲斐もなく公刊の機會が得られないで翌々年におよび、やうやくにしてフレーザース・マガジンに連載され、それからさらに三年を経て、しかも本國ならぬ米國ボストンから辛うじて出版されるにいたつたサーター・レザータス Sartor Resartus (The Tailor Patched『補綴裁縫師』)は、後年かれの文名が一代を壓するにおよんでは、その人生觀も社會觀もあげてことごとくこの一書に見るべしとされ、その他の所論はつまるところその敷衍あるひは適用であると認められるにいたつた代表作であり、またかれの唯一の純文學作品である。

稀代の奇書たる同書の結構は一八三一年獨逸 Weisnichtwo の Stillschweigen 書店發行、von Diogenes Teufelsdröckh J. U. D. 著 Die Kleider, ihr Werden und Wirken (Clothes, their Origin and Influence『衣服、其生成及び効果』)を英吉利の讀者に紹介し、かたがたこれにたいする編者の意見をも附加するといふやうな、小説的技巧的で韜晦的なものである。全卷が三部から成りたち、第二部は主として『哲學者』の傳記のために費されてゐるが、實際は著者カーライルの自叙傳小説の斷章であつて、かれの前半生の精神史を力づく物語るのである。他の二部はすなはち『衣服哲學』の解説といふ形である。

いふところの『衣服』とは第一に人間の衣服をも意味するのであるが、それは衛生上の必要以外に象徴的な効果または作用をもつものとしての衣服である。しかしさらに進んで、およそ或事物とその本來の意義（または精神）とが或洞觀によつて識別されるとき、前者をもつて後者の『衣服』であると看なすのである。肉眼をもつて見うる宇宙は、見るをえざる宇宙精神（神）の象徴すなはち『衣服』にほかならず、人間の肉體もまたその靈魂

あるひは神性よりすれば『衣服』にほかならぬ。なほこれにとゞまらずしてかゝる觀察の方式を人爲的あるひは社會的事物にもおよぼし、外觀たる記號がその背後にあるべき意義（價值）と必ずしも照應しないで乖離し、あるひは全く後者を排除して前者のみが存在する事實を摘發するところにカーライルの象徵論の大いなる特色があり、社會論に發展する契機があるとおもはれる。

で、同書をもつて一つの廣汎な範圍にわたる象徵論であると見ることは不當でなく、しかし強ひてその中からなんらかの組織あるひは少くとも思想の順序をもとめれば、——（これを求めるのはカーライルを理解するうへには無用のことかも知れぬが）おほよそ次ぎのごときものである。いはく、宇宙は象徵であり、社會的事物もまた象徵である。宇宙も社會もともに進化する。社會の進化は象徵の更改（古くして生命を失へる象徵の破壊と新しき生命の象徵化）となつてあらはれる。古き象徵を棄てるものは眞の立法者（英雄）であり、象徵の象徵たることを觀じうるものは眞の詩人（英雄）である、と。

しかるに同書を他の半面から見れば、『驚嘆』の讚美にみちたところの全然一個の詩的文章である。『驚嘆』の意義については前節で一言したのであるが、『象徵』論と關聯させてこれを説けば、それは宇宙、人間、および社會的事物の一切を象徵と觀じうるにいたる電光的過程であり、また假相を貫いて本體に徹する洞見である。それが宇宙、人間にたいする驚嘆である場合には、受けるところの最高の感銘は『不可知』であり『神秘』である。つぎにそれが社會的事物にたいする驚嘆である場合には、外觀たる象徵と實質たる價值との乖離にたいする一種の距離感、換言すれば虚偽と眞實との判別であり、その結果は汝は王笏しやくを有すれども眞の王に非ずといふたぐひの斷案ともなる。かれが神秘主義者であると同時に急進論者であつたゆゑんはこの點から理解されるものと考へ

られる。

右に述べたところによつてサーター・レザータスの題名がおほよそ何を意味するか的一端を知りうるとおもふのであるが、内容の一斑を紹介するにさきだち、同書中にカーライルがみづから批評を加へてその缺點であると指摘した二三の言葉により、衣服哲學の特色をもつと明かにしておきたい。まづ同書〔Sartor Resartus 中に紹介されたる “Die Kleider”〕が『大膽にして燃犀なる鋭利の筆、および峨々獨立せる獨逸主義と博愛主義とにみてる傑作』であるとは、Weissnichtwo'sche Anzeiger の批評であるけれども、『すべての天才の作のごとく』この書もまた『洞察と靈感とが、愚鈍や幻^{クランツェン・イマジネーション}覺や或は全き盲目とすらも混淆せるもの』である。そして『ほとんど許しがたき缺點』はそれが『ほとんど全く順序を缺いてゐること』である。であるから『いかなる思索の連鎖または實に無限に織りあはせたる組織によつてこの大いなる定説がこゝに展開されるか』と問ふことは無益なのであつて、『いづれにせよ、わが先生の方法は、眞理がすべて繼ぎあつて一筋となつてゐる普通學者の論理と異り、まづいはゞ全體系と全領域とを貫く大なる直覺を用ゐるところの實踐理性の方法であつて、『すべてが一大迷路ではあるが、『信仰の囁くところによれば一つの計畫なきにしもあらず。』それにしても諷刺や比喩的の奇想や預言めいた惡口ばかり多くて、明かな論理的敘述がないのは、『わが先生が常に神秘的なるのみならず、むら氣であつて、際限もなくかれ自身を、眼を眩ます明暗法のなかに包む』ことを好むからである。詮するにこれは『故意と必然』の双方が原因なるべく、大いなる天分を有しながら實地において失敗した『わが先生』のごとき人にあつては文學もまた正しい繁榮を見ることはないであらうといふ。

カーライルが自己の思想の表現が秩序を缺くのみならず、思想そのものが論理を無視したものであることを自

認してゐたことは以上によつても知られるのであるが、みづから『むしろ蘇格蘭のハギス』〔羊膾等の臟腑を刻み、
 慈、燕麥、塩、胡椒等に
 煮たる物 Haggis〕にも似たるべらぼうにどろどろの乾葡萄プデン』とまで評した『衣服哲學』の無類の亂雑さは、かれが悉く故意に計畫したものとばかりはおもへぬ。『衣服』といふ新奇な着想から引いて、かれが過去において思索體驗した最善のものをことごとくその思想のなかに綜合しようとするにあたり、渾然たる一體をなす完成品に仕上げようといふ願望をかれが懷かない筈はない。たゞ着手の後、その到底うち勝ちがたい困難を覺るや、驟然その企圖を抛擲して現に見るやうなつぎはぎだらけの編輯法を工夫するにいたつたものではあるまいか。題名にいふところの『補綴裁縫師』の意義も、かくしていいよいよ明かである。

IV

さて、これからサーターの梗概を述べるにあたり、簡潔を期するため、同書の編成の順序から離れて次ぎの四項にわちち、なるべく著者の用語と語勢とを變じないことを念としつゝ要旨をまとめてみたいとおもふ。

(1)『驚歎』について——第一に彼の『不可知』論であるが、これを思想としてはかれ獨特のものでなく、おそらく人類の思想中最も古いものの一つと思ふけれども、それがユニークな體驗を通して文學的に表現されてゐるところにほとんど無比の獨創性があり、高い文學的價值があるのである。こゝにこれを擧げるのはしかしその意味からではなく、『神秘』の説と不可離の關係があるとおもふためである。

おもふに通常或物にむかひ、『そは何か』と問ふ者は、みづから意識せずともすでにその物にたいして幾何か基本的知識または心の用意を有し、たゞその不確な部分について、いはゞその知識の擴衍を求めるのであるから、その問ひはみたされうべき筈のものであるが、しかしもしも問者がなんらかの理由により、今日までの知識の構

造をくつがへし去つて、再び或物にむかひ、『そは何か』と問ふにおいては、たとひその物がたゞ一片の草の葉であるにせよ、これにたいしてはもはや何びとも正當にして十分な回答を與へうべからざるは、あたかもすでに底を抜き去つた容器にはもはや何物をも収めがたいやうなものではあるまいか。宇宙の本體を問ふとは要するに『知識』の構造を抜き去つて精神の奥に無窮の深淵を開き、さて宇宙にむかつて『そは何か』といふ問ひを發することである。カーライルの問ひはすなはちこれなのである。で、その答はありえざるがゆゑに、その問ひを發するとともに生ずる感銘は『不可知』である。いな、むしろ『不可知』の感を表現する言葉が『問』の形式をとつたと見るのが適當ではないかとおもふのである。いはく、『思辨的傾向を有する人間には冥想的な甘美な、しかし畏ろしい時期がくる。』それは『驚嘆と恐怖の念にみちて「我」と呼ぶこの我とは何者ぞといふ答ふべからざる問を已れに向つて發する時である』と。この『答ふべからざる問』を發することこそは、カーライルが實にその永き生涯にわたつてかれの著述の中を通じて幾度となく繰りかへさざるをえないものであつた。

たゞこゝにその『不可知』の感銘がかれを震撼し顫慄せしめるといふゆゑは、他に求めなければならぬ。それを詩的感情といふも宗教的感情といふも名づけるものの自由であるが、とにかくかれの感情に發するものである。『創造はわれわれのまへに燦然たる虹のごとく横はるけれど太陽はわれわれの背後にわれわれの眼から隠れて存在する。』といひ、また人間とその生活の世界とを夢みる者と夢とに喩へて『夢も、夢みる者ともに神、眠らざる者の造れるものなるにわれわれはかれを見るあたはぬ。』といふのは、宇宙の第一原因にたいする一種の憧憬であるとおもはれ、かうしてかれは神秘觀に入るのであるとおもはれる。

第二にその『神秘』觀であるが、カーライルにあつては、物の本體あるひは第一原因を人は知ることができな

いといふことから、たゞちにすべての物は測るべからざるもの、神秘なるものであるといふ思想に展けてゆく。すなはち『われわれの全き日常生活もまた精靈的である。われわれがなすところのすべては神秘、精靈、見えざる力より湧出し……實體すらも大なる神秘の深所から出現したものである。』『汝の日常生活は不思議（Wonder）を以て纏はれ、不思議のうへに立脚し、そして實に汝の毛布や半袴も奇蹟である……』曾て歴史のうへに出現して今は存在せざる人類——『かれらはいづくより來たか？——おゝいづくへ去つたか？ 感覺も知るなく信仰もこれを知らぬ。たゞそは神秘より神秘へ、神より神へ行つたといふばかりである。』

神秘といふなかにことに諸力、Forcesとして見た宇宙にたいする神秘の感、なかんづく人類のなかに存してそのすべての發現の源となるところの力にたいするカーライルの神秘の感是最も著しい。すなはち暮れゆく野末に一點の星のごとく輝く火光は、煤だらけの鍛冶職が鐵砧かなざねのまへにうづくまつて馬蹄か何かを打つてゐるのであらうが、いまやそこには『鐵の力、石炭の力、およびそれにもまして不可思議なる人間の力』がたくみに親和し相戦ひ、そして力の勝利が演じられてゐるのにほかならず、そしてその『薄黒い僧侶』（鍛冶職）は『言葉によらず脳髓と筋骨とによつて』力の神秘を説くものであり、それこそは『人間力の福音』の一端であつて、この力は現に多くを支配し、他日すべてを支配するにいたるべきものであると、さうかれは見てゐるのである。

第三に『驚嘆』への手引であるが、如上の神秘觀にいたる道は直觀よりほかにはないのであるから、カーライルは最も力づく『驚嘆』の重要を説き、いかにもして讀者をかれの驚嘆の世界へ誘ひ入れようとして手を變へ品を變へ、文學的な工夫を凝らすのである。その第一階段ともいふべきは、かれの特色たる Transcendentalism とはむしろ一見して反對極に立つべき筈の Descendentalism であつて、諷刺作家スキフトのいはゆる『鰐足の二』

『股動物』といふ人間にたいする最大侮辱の稱呼に大いに共鳴してゐるのである。人間はその衣服と同一不可分のものではなくて、本來裸體であり、最初に買ふか盗むかして着ない以上、衣服はないものであるといふ明白すぎるほどの事實がいかなる人間の頭腦にも浮ぶことがないのであるが、いまでもし宮廷やその他の嚴かな儀式や接待の宴などで物々しくゐならば王侯、爵位の人、顯官、將軍、貴紳のごとき、その金色燦爛と装ふところの装束が、魔法の杖を一振り揮つたごとく忽然として一刹那に脱落し去つたところを想像して見たらどうであらう。残るところの眞實の姿はいづれもおなじ『變な恰好の頭のついた二股菜腹』ではないか、と。

これ社會關係を構成する一切の制度、慣例、風習から生じたすべての外、觀が、人間の意識を決定しさつてその腦裏になんら疑惑の餘地をのこさない事實を、人間の精神が習慣に陥りやすく、直覺に乏しいものであるとの説明の方面から、指摘したものである。あらゆる世間的、社會的の附屬物を剥ぎさりつゝ飽くなき無遠慮をもつて人間を凝視し、つひにどのやうな種類の人間をも赤裸の一動物に卑下しざるところから、いかに一轉してかれの超絶主義が生ずるか。かれをしていはしめれば、それは『純粹理性の眼』をもつて人間を見るによるのである。

かれの見るところによれば、『驚嘆』の妨礙となるものは第一に人間の習慣である。すなはちその『不思議なるもの (the Miraculous)』も單なる反復によつて不思議たることをやめるやうにわれわれをまるめこむところの骨^{コッ}は最も巧妙なるものがある。第二に名稱である。人間は新しい物を發見すれば直ちにこれに名稱をあたへ、會て見なかつた物を見れば直ちにその名稱を問ひ、かくてあたかも名稱そのものがすべてを説明したものとごとき考へやすいのである。

しかし『不思議を匿すすべての幻影的な外觀』のなかで、世界を包含してゐる二大根本的幻影は時間および空

間である。時間および空間は、思惟形式であつて、われわれの『實踐的理性、概念、想像、空想』等を制限し決定するのは適當のことといふべく、また避くべからざることであるが、『純粹の精神的思索』においても、それによつて眼を覆はれるといふことは不可である。奇蹟は距離の遠近や時間の長短に關したことはない。遠いところに存在する物のみを不思議に思つたり、一定の時間の経過のなかに起るものを不思議と思はなかつたりするのは、空間や時間に迷はされてゐるのである。かりに人間の長い生涯がそつくりそのまゝ三分間に経過するところを想像して見よ、それを驚歎しないではゐられまい。人間が『真正正銘の幽靈』であるといふことがわかるであらう。

カーライルの記すところによれば、主人公の Teufelsdröckh は『宇宙的驚歎の必要とその大なる價值を主張し、それをもつてかゝる奇異なる遊星の住民にとつては唯一の理に叶つた稟性であらねばならぬと考へてゐる』さらに述べていはく『驚歎は崇拜の基礎である。驚歎の支配は人類にあつては永久破壊すべからざるものである。』と。すなはちまづ驚歎と崇拜とをむすびつけ、かゝる崇拜をもつて永久消ゆべからざる人間の本性となし、眞の意味における人類の宗教と政治（しかもこれすらカーライルによれば結局別箇のものではありえない）との可能をその本性のなかに認めようとするカーライルの中心思想の一端はこゝにすでに現れてゐるけれども、それが一層明瞭な形をしめすにいたつたのはなほ後年のことのやうにおもはれる。

(2) 象徴について——カーライルの象徴論が自然にたいしてのみならず、社會的、人爲的事物にたいする考察におよんでゐることはその大なる特色であつて、すでに一言したが、まづ宇宙および人間についてのかれの象徴論を見よう。

『すべて眼に見ゆるものは記號である。汝の見るところのものはそれ自體のために存在するものにあらず。嚴格にいへば全く存在せず。』註。幻影なりとの意である。』物質はたゞ精神的にのみ、そして或觀念を表現し、それを具體化するためにのみ存在する。』『物質は決して賤むべきものにあらずとすれば、精神であり、精神の表現である。もし決して尊重すべきものにあらずとすれば、さらに尊重すべきもの他にありや?』『宇宙は神の宏大なる象徴にほかならず。……人間自身神の象徴にあらずして何か。』『汝いまや神の象徴を有せずといふなかれ。神の宇宙は神の象徴にあらずや』人間は『見得るやうにせられたる精靈』『一の精靈、精神および神の發現』である。

で、カーライルの最も好んで引用するのは獨逸の抒情詩人ノヴァーリスの言葉である。いはく『世界には唯一の寺院あり。その寺院とは人間の肉體なり。この高尚なる形體よりさらに神聖なるものもあるべからず。人間のまへに拜跪するは肉にあらはれたるこの天啓を崇むるなり。人間の肉體のうへに手をおく時、われら天に觸るゝなり。』註。此句の引用“Heros”にも見ゆ。』おもふに以上あげたとき感動あるひは思想からは、かりに人間崇拜主義を生ずべしとするも『英雄崇拜』の思想の生ずる餘地はないのである。であるからカーライルの思想の分析に際してはこの點を一つの問題として残しておきたいとおもふ。なほカーライルは衣服哲學に關して次ぎのごとくいつてゐる。『いかに一切の自然と生命とが「時の織機」で織られ、またいつまでも織られてゆくところの衣服、一つの「生きた衣服」にほかならざるものであるか。こゝにこそ全衣服哲學の綱領、いな、すくなくともその働くべき分野があるのではないか。』

つぎに社會的ないし人工的象徴に關するカーライルの獨特の所説を擧げよう。かれは象徴をわけて固有價值を有するものと附帶價值を有するにすぎないものの二つとした。紋章、軍旗等をはじめとしてすべての國民的、宗教

的服裝および慣習は後者に屬するものであつて、それ自身何等固有の價值あるひは神性をもたないものであるが、たゞ人間がこれによつて神聖なる觀念を認め、あるひは認めようとしてゐるものなのである。十字架のごときは最も顯著な例である。であるから象徴そのもののみにたいして本來人間がいだくところの神聖なる觀念や尊崇の念を、象徴のかげにかくれたる無意義の人物が私することはつねに起る。かくて主人公 Teufelsdröckh は帝王の笏や上衣にも『凡庸、收顔、輕蔑すべきもの』を認めざるをえない。これに反して固有價值を有する象徴はそのなかに多少とも無限、神、永遠などと呼ぶべきものが感覺到顯れたものゝ謂ひであつて、一切の藝術品や靈感を受けたる英雄の傳記等はこれに屬するのである。そして『最高の象徴は藝術家あるひは詩人が昇つて預言者となり、そして萬人がこれを神の出現と認めてかれを崇拜することである。すなはち宗教的象徴の謂ひである。』

しかしながら宗教的象徴といふも種々雑多であつて、文化の程度にしたがつてその神として具體化するものに優劣がある。時代のすゝむとともにこれにたいして新しい價值をくはへてゆくのであるが、つひには面をおもてそくなひ通俗に墮せざるをえなくなる。すなはちこれらの象徴もまた古くならざるをえず放棄されざるをえなくなるのである。しかも人間は必ずしもたゞちにこれを發見しないために、『この世界の檻褸屋』において不用となり破れはてた象徴がいたるところに垂れさがり、人間を『瞞着し、沮止し、繫縛し』ようとする。これを振りおとしてしまはないならば、檻褸の堆積裡に窒息するにいたるであらう。人間は一旦受け入れたものはその固有の意義を失つたあとまでも手放すまいとする天性を有するために、曾て神聖なりし象徴にして今は『つまりぬ見世物』となつたものをも依然として固執して棄てないのである。

(3) 社會について —— 社會の變革に關するカーライルの思想はおよそつぎのごとくである。やゝ茫漠たる

をまぬかれないが、かれが歴史および社會にたいして深い洞觀をもつてゐたことは一言したが、自由主義者、功利主義者にたいして一見不倶戴天の論敵であるかれが、その衷心においてはかれらの繁榮が社會上必然の順序であることを十分に讀んでゐたことも明かなのである。かれの正しく見るところによれば、いまや古い社會は死に、その中から新しい社會の誕生せんとする途上、かれら自由主義者・機械論者は古い社會を解體せしめるだけの役目は果しつゝあるものである。かれらにたいするカーライルの抗争はいはゞいつも高飛車に出るのであつて、しかもその批評たるや口の切りはじめは極度に猛烈でほとんど宥すべき餘地のないものを叱りとばしてゐるやうであるが、最後になると極めて寛大となり、「強意見」の仕舞のやうにをはつてしまふ。サーターに見えるかれの社會論もその例である。

すなはちかれはいはく、現代においては『本來の意味における社會は消滅したといつてしかるべきである。』ただ許多の感情や遺傳的習慣が結合してその解體をふせいでゐるにすぎない。『共同の家庭といふ觀念』もなく、ただ『群れ溢れてゐる合宿所』の觀念しかないやうなものを社會と呼ぶことはできぬ。各自は互に孤立して隣人と思ふことはない。『金巾切りや喉切りの奪ひ合ひに鋼のナイフを用ゐないで、たゞ一層狡猾な手段を用ゐることが出来るからといつて、それで平和といへるか。』從來の指導者も支配者もはや力を失ひ、四方から聞えてくる言葉は『Laissez faire. かまはずにおいてくれ。お前の支配は無用だ。そんな光は暗闇よりも暗い。お前はお前の賃銀を食つて眠るがいゝ！』かくて貧者は俄と過勞とのために斃れ、富者は『さらに憐れにも』怠惰、飽食、肥滿によつて斃れる。教會は沈黙しをはり國家は警察署に成りさがつた。

かくて Soul-Politic は去り、残るところは Body-Politic をいかに適當に埋葬しようかといふ問題である。自由

黨員、經濟學者、功利主義者等はたしかに現存の社會制度を分解し破壊しつゝあるのであつて、その棺を擔いで火葬場へ運ぼうとしてゐるのである。かれらの職分は破壊にあつて建設にはない。機械主義者や不信仰者は古い象徴を剥ぎさつてわれわれを赤裸にしようとしてゐる。〔註、Teufelsdröckh の本來の主義からすれば大いに祝すべきことにもなる。〕そしておそらく無數の衣服はおほかた焼きすてられ、たゞ『そのなかの健全な襦袢』だけが綴ぎあはされるにいたるであらう。社會がほんたうに死んだのではない。死んだといつたのは殻にすぎぬ。蛇が舊い皮を脱ぎすてるときには、新しい皮はすでにできてゐるもので、それとおなじく社會においても『創造と破壊とはともどもに進行する。』凝視すれば現にその事實を目撃しうるのであらう。現代が不信仰の時代であつても、『信仰の時代と否定の時代とは心臓の收縮運動のごとく交替するものである』といふことを知る以上、不平をならす必要はない。

さて、サーターの主人公 Teufelsdröckh は最後に社會を不死鳥 Phoenix に喩へて死灰から新しく甦るべきものとなし、その『死の誕生』がいかなる時に要求されるかは『見えざる不時の事に屬す』といひ、つぎのやうに結んでゐる。『いづれ烈しい動亂と大火との二世紀ほどのち、火の創造が完成され、さうしてわれわれは再び生ける社會の人となり、もはや戦ふことなくたゞ働くをもつて足るにいたるといふことを、運命が人類にたいして提議したら、人類はその申込を承諾する方がおそらく氣が利いてゐるといふものではないか。』と。

なほ社會の『有機的纖維』といふカーライルの觀念について述べてみたい。不死鳥の死の誕生のやうな新社會の生成するのを、二百年も生きながらへて見てゐることは個人には不可能であるから、新しい社會のために『神秘的にみづから紡いでゐるところの有機的纖維』を見ることをもつて最上としなければならぬ。

人類が互に兄弟であることを否定するのは無駄である。憎惡、嫉妬、嘘言のごときは『轉倒したる同情』といふべきもので、これもまた有機的關係たるを失はぬ。『柔き愛の絆、あるひは必要といふ鐵の鎖のいづれによるにもせよ、われわれを一つのものに結合せしめる羈絆は眞に不思議である。』『不思議なる人類個々人のなかに存する明瞭なる生命の流れとして、明瞭ならざる幾多の生命の流れの中をいはゆる輿論オピニオンの主潮が流れてゐる。そして制度、政體、教會、なかんづく書籍のなかに保持されてゐる。思想は曾て死せざりしこと、その創始者たる人が全過去よりこれを集め且つ創造せるがごとくかれはまたこれを全未來に傳へるといふことを理解し且つ知るの美しいことである。』一切の事物は相繼承生生長轉展し、藝術、制度、思想等いづれも完成したりといふことはできないが、つねに完成にむかひつゝあることはたしかである。だから英吉利の民黨員のごときも次ぎの代には急進黨となり、三度目には英吉利改造者 (an English Rebuilder) となる。かくて人類は遅かれ早かれ進歩しつゝあるのであるから此點に着目して人はみづから慰めねばならぬ。

高い名譽の稱號がこれまでは戦争から由來したといふ事實には驚かざるをえない。Herzog (Duke, Dux) は軍隊の統帥者の意味であり、Earl (Jare) は強者の意味である。一千至福年すなはち『平和と智慧の統治』は古くから預言されて今や日ましに疑ふべからざるものとなりつゝある以上、かゝる戰争的稱號はその巧味を失つてさらに新らしく高尚なものを工夫することが必要となるであらう。そこで永遠に繼續すべき唯一の稱號として King を擧げる。むかし Kōning と書いた König (King) は Ken-nig (Cunning) の意味で、それは Can-nig と同じことである。されば人類の主權者は永久に King と號されなければならぬ。『王は神權をもつて支配すと神學者によつて記されたるは結構である。かれは神よりの權威をかれの中に帶びてきてゐる。しからずんば人はかれ

にそれを認めないであらう。人は自己の王を選択しうるか？ 然り、しやれもの王を選んで一緒に茶番狂言を演じることはできる。しかし人の支配者たるべき者は一段高い意志を有し、かれらのために天において選ばれたものである。天の選める者にたいする服従の中においてにあらざれば他に自由ありとは考へられぬ。』

こゝでカーライルは主人公 Teufelsdröckh が、よく觀察すると『深刻な、沈黙した、靜かに燃えてゐる急進主義』を藏する者であつて選舉權をすら詰らぬものに思つてゐるやうであると註して、さらにいはく『天より來り天に導くところの、そしてわれわれすべてにとつて眞に缺くあたはざる自由なるものが、おそらく諸君の例の選舉箱の中で機械的に孵化され實現されうるかいなか、あるひは最もはなだしきは何等か他に發見しうべき、あるひは工夫しうべき箱、建物、蒸氣機關等のなかで實現されるかいなか、いまでもよし將來でもよし、普遍的の疑ふべからざる實驗をもつて諸君みづから十分やつてみるがよい。それはえらい便利なことだ。これまで發明された製造のすべての藝當を超越してゐる。』しかし畢竟するに、現今はどこでも同じやうに問題が「舊き家を上から下まで建て直すといふこと」であつてみれば、（普請中も其中に住まねばならぬかぎり）この際代表機關制 Representative Machine よりよい他のものがあるだらうか。けれどもとにかく「諸君が余の鎖を裝飾の花綵はなびなに編んでゐるだけの時に」自由の名をもつて余を欺いてくれるな。』

さて最後にカーライルのいはゆる『有機的纖維』すなはち新らしい社會を作る要素たるべきもの、かれの見るところによれば人間の天賦と本性とに起因してその眞の宗教および政治を、したがつて「社會」を、可能ならしめるもの、いかなる人類社會においても曾て何等かの形態のもとにあらはれざりしことなく、將來もなかるべき恒久の法則、すなはちかれをして畢竟人類の運命と未來とを十分樂觀せしめるに足るものがある。これ『英雄崇

拜』である。かれはこの點に「ひまふぶとき」Teufelsdröckh の『冥想的急進主義の精神惑亂的蝶堂』から抜けて周圍を見まはし『有機的纖維』を求めて編者が探りあてたものは『英雄崇拜』であつたと述べ、それは陽氣な性質のものごとくであるが、はなはだ神秘的なものであると稱してゐる。

『人間がまさに服従すべきものには服従せざるをえないやうに自然は巧妙にさだめてゐる。いかに微弱な神の啓示にたいしても人間は不信心でゐることはできぬ。わけて同類の人間のなかに神(Godlike)のあらはれたときは、かくて眞の宗教的忠誠は永久にその心に根ざしてゐる。いな、あらゆる時代において、現代においてすら多少正統的の英雄崇拜が現はれてゐる。英雄崇拜があまねく人類のあひだにこれまで存在し、いまでも存在し永久に存在するであらうといふその事實のなかに、すべての政道が久しく立脚すべき生きた磐石の基礎を諸君は見るであらう。』例へばヴォルテールのごときは年老いて萎びれた男であり欺瞞者で懷疑家で女向きの宮廷詩人であつたけれど、最も賢人らしく善人らしく見えたがために、太公もかれの笑顔を求め佛蘭西の最も美しい人もその髪をかれの脚下に横へたものである。かれらの神性は猿真似らしきものではあつたけれど、全巴里はかくて英雄崇拜の大殿場となつたのである。であるからいかなものといへどもおよそ神性を有するもの、あるひは有するがごとく尤もらしく模倣するものにたいしてすら全く破壊すべからざる尊敬を人間が有するものだといふことを知るべきである。

なほ右の文中に見える『人間の中に神の現はれたる時』といふ、その神の何たるかについては、これが解釋を助くべき材料を同書中に見いだしがたく、たゞ前述の象徴論以下の項に述べた人體をもつて神の發現なりとする思想とは根本的に系統を異にするといふことだけは斷定しうるかとおもふ。また、眞の英雄にあらずしてたゞ英

雄らしく装ふ者にたいしてまで、人間はその本性からこれを崇拜せざるをえないといふ觀察は肯綮にあたるとしても、かくては『英雄崇拜』の法則は危険なる一面を有するものとならざるをえない。ともあれカーライルがかれの化身たるサーターの主人公を評して、*...accounting the inevitably coming as already here, to him all one whether it be distant by Centuries or only by days...* とする一句は、かれの著書を読む者のまづもつて握つておくべき鎖鑰であらう。

V

サーター・レザータスと前後して執筆され、最も明白にカーライルの信條が述べられてゐる點で注意すべき二つの論文のうち、一つはすでに紹介した『時代の徴候』で、もう一つは“*Characteristics*”『特性』である。これも一八三一年、エヂンバラ評論に發表された。ともにその終局の眼目は、勞働の福音を述べるにあつたといへるが、同論文の特色は、かれが後年しばしば筆にした『沈黙』の意義を語り、ことに『無意識』の神聖を力説した點にある。人間は制度の產物にあらずして、むしろより正しい意味においてその創造者であるといふこと、すくなくとも制度が一切にはあらずといふことを説いて人間のなかに存する生命力の神秘と偉大とに讀者を導かうとしたものは『時代の徴候』であつた。かれはそのなかでメカニカルといふ言葉の意味をできるかぎり擴張し、一方ではダイナミカルといふ言葉を對擧して、およそ人間の内から外にあらはれるすべての本能的なもの、衝動的なもの、創造的なもの、——かれが好んで用ゐた言葉にしたがへば『神のごときもの』『神秘的なもの』『無限なるもの』を意味せしめた。

いま『特性』においては、そのダイナミカルと稱すべきものの發現に關して一個の考察を下してゐるのを見る。

カーライルによれば、およそ生命力の活動の存するところ、——藝術、道德、國家生活等すべての方面において——その活動が健全なりやいなやを検する標準は、それみづから目的を自覺することなく衝動的に無意識に演じられてゐるが、あるひは反省的、解剖的、意識的に演じられてゐるかの如何にかゝる。そして現代の社會は、學問、宗教、藝術、政治等すべての生活において、はなはだしく意識的なこと會てその例を見ないところである。かやうな疾病的狀態は永く繼續すべきものではなく、やがては無意識と神秘との領土へ、『沈黙』の世界へ、會てなかりし深さにまで立ちかへるべき順序である。

なほ社會變革にたいする認識や人類窮竟の目的に關する信仰と行爲との結合の主張等は、すでに前の二論著の紹介に擧げたものと異ならず、たゞ政治組織の變革を招いた原因を、舊き方法が新らしき資源の増大を處理したはざるにいたれる點にありとしたことが注意を惹く。といふのは、かういふ歴史の見方は唯物史觀のそれと一面において軌を一にするやうに見えるからであり、かういふ見方の一面は決してマルクス・エンゲルスの獨占物でないといふことを指摘するのは無意義でないとおもふからである。人類の歴史を英雄傳の系列のごとく考へたといへるカーライルは、しかし決して一部のカーライル批判者が普通に考へるやうな淺薄な歴史家ではなかつたのである。

さて『特性』においてかれは『健康』を論じていふ、『健康者は健康を知らず、知るはたゞ病者のみ』とは醫師の金言ではあるが、それよりも遙に廣い意味に適用されるものである。すなはち身體の療治においてのみならず、道德、學問、政治、文學等においても、およそいかなる形態においてにもせよ、ヴァイタル Vital と名づけらるべき種類の力が働いてゐるところには、その働きの正しきやいなやを驗する標準が、この金言のなかにある。完

全な健康體の第一要件は、各機關が『無意識に、不注意に』その作用を行ふことであつて、集合せる種々の活動が全體でもつて一個の完成した活動となつて現れなければならぬ。生命の諸要素が適當に配合されて調和した絃樂のやうに流れいづるかぎり、それは旋律であり階音であつて互にさまたげあふことはない。實に『一致や合意はつねに沈黙かまたは柔和な聲である。』少年時代をかへりみれば、多くの人は『明るい空氣のやうな清明さと彈力と完全なる自由との時季』を憶ひおこすであらう。そのとき肉體はいまだ靈魂の獄屋とならず、われわれはみづから四肢を有することを知らずして飛んだり跳ねたりしてゐたのである。しかるにいまや『自由と天國のごとき無意識』の時代の記憶は色褪せて詩的夢想のなかに失せさり、もはや『多くの事物にたいしてあまりに意識的となつて』しまつたのである。生活が最も多くの場合『分裂と痙攣との烈しき震聲』であるといふことは覆ふべからざる事實なるにもせよ、『すべての生命的活動において、自然の明白なる目的と努力とは、われわれがそれに無意識であり、且つ食氣強き田夫のごとく吾人は一の組織を有するといふことを少しも知らないといふことにある。』人間の領土は窮みなきものであるがゆゑに、人間が『意識をもつて、また豫考によつて支配するところ』は零碎なる部分にすぎない。人間が工夫しうところ、いな、人間が知り且つ會得しうる一切は眞に機械的なる、小なるものである。いづれにせよ偉大なるものはつねに生命あるものである。それは眞に神秘なるものであつて、たゞその表面のみ理解しえられるのである。『しかしながら自然はそれが神秘であるといふことをすらも吾人に隠してゐるかのやうである。されば人間の生命は厳しく考へるならばそのなかに『無限と永遠』とを有するにもかかはらず、人間はそれでもつて日傭賃銀を儲ける單なる道具のごとく手輕に考へてゐることができるのである。

また藝術と道德とを論じていふ、吾人の思想のうち、箇條分けにしたやうな分明な形態をとりうるものは單に

その表面のみである。『論證と意識的行論の領域の底深く瞑想の領域が横はつてゐる。この靜かな神秘的深みのなかにわれわれの生命の力がこもつてゐる。』もし或物が單に製作されるのでなくて創造されねばならぬとならば、この領域に踏みこまなければならぬ。『製作はたれにもわかるが凡庸にすぎず、創造は偉大にして理解されざるものである。』箭の場合は人は何をなし、いかにしてなしたるかをみづから知つてゐるが、後の場合にはみづからそれを知らずして、靈感といひ、あるひは神性の賜物などと他から呼ばれる。シェクスピアはハムレットやテムベストを書いて少しも得意のふうがなく、それが驚歎に値するものであるといふことをわからずにゐる。しかるにミルトンになると大分自己の才能を意識してゐる、それだけ前者に劣るのである、と。

またいふ、——學問においても『健全なる理解』は論理的すなはち意識的のものではなくて直觀的すなはち無意識的のものであるが、『人間の行爲および行爲のなかに主として現はれる力、すなはち名づけてわれわれが道德といふもの』に關しては無意識の法則はことさら重要である。聖句にいはゆる『汝の右手の爲すところは汝の左手に知らしむることなかれ』である。『この行爲がいかに價值あるかを汝自身の心にも嘯くことなかれ！——もししからざればそれはすでに無價值となりつゝあるべし。』善行はそれを爲すことが自然で、それよりほかにどうもしやうがないといふごときものでなければならぬ。これはもちろん理想であつて在りうべからざるものであるが、しかしわれわれが永久にこれにむかつて努力すべき目標にはちがひない。自己省察はたしかに疾病の徴である。それが同時に平癒の徴であるかいは別である。抽象的に徳について語りすぎれば却て世人の疑ふところとなり、また大説教には施物が少ないなどと穿つたことをいふ者もある。さらにひろく見れば、『英雄主義の時代は道德哲學の時代にあらす』徳が哲學化されうる時は、すでにそれが健康を失つてゐるのだといふことを

知ることができる。右に述べた自意（Voluntary）と意識との、無意と無意識との、綿密な關係、および人生のすべての方面において前者が後者に關係する割合を研究することは、心理學と生理學との問題に深く入ることとなるのであるが、こゝではそれを目的とするのではないと。

さらに社會と現代の徴候についていふ、——いかなる社會もなんらかの『精神的原理』を有せざるはなく、必ず一つの觀念を具現せるものであつて、法律、政治、努力の傾向、慣習の特色等すべての進行がその觀念によつて規定される。それが一個人あるひは一階級にたいする歸依たるにもせよ、一の信條、制度あるひは古代におけるごとく土地の一定領域にたいする歸依たるにもせよ、それは眞の忠誠たることに變りはなく、そのなかには宗教的、最高の、まつたく無限の性質を有するのである。それは本來國家の精神であり生命であつて他の生命の形態と同じく神秘的に、『意識の領域を超えたる深みのなかで陰然活動するものである。』だから服従の觀念が絶えず萬人を靈感せしめつゝあるかぎり、主權にたいする服従を教へ、あるひは殊更に賞讃し認識する必要はないわけである。國家の神秘的な意義が何であるにせよ、それが各人の心に生命をたもつて存続するかぎり自ら疑ふ必要はなく、たゞ外部に發露し、活動によつてみづから表現すべき筈である、と。

そしていふ、さきに擧げた金言を標準として現代の社會を見るに、『開闢以來、かくまで自己意識の烈しい社會は聞いたことも讀んだこともない。』宇宙と人間との關係、人間相互の關係は一の疑問となり、すべてが解剖的に研究されるほかはなくなつた、と。なほ以下に論旨を展開してみよう。

まづ社會の外部の疾病ともいふべきものは『走りながらも讀みうる』までになつてゐる。富はみづから集團となり、貧窮もまた集積してまつたく相分離し、『陰陽兩極の力のごとく』相對立するにいたつてゐる。文明の最高

度にありながら人類の十分の九は野蠻人あるひは動物のそれにも似た下等なる戦ひすなはち飢餓にたいする戦ひのなかにあり、『邦家は例なく繁榮のかぎり^{やゑ}を盡して富んでゐるのに、その國のなかの人間の貧しくして心身のあらゆる糧、信仰、智識、金錢、食物等に窮乏せるは曾て見ざるところである。』社會が不死のものでその死は新生となるならば今やそれは最後の苦悶の中に跪きつゝあるものと見なければならぬ。

さらに現代の社會の精神的状態を見るに、人間の力が『分離せざる健全なる力のままで』内から外に向つて働くのを見ることなく、すべてのものはその力を内にむけ、『みづからの聲を聴かんとしてゐる。』宗教はみづからを意識し、『次第に創造的、生命的でなくなり愈々機械的となつてゐる。』そして全體として見るに近代の基督教は形而上學の中に霧消したものである。文學は宗教の一つの枝で、他日その幹となるべきものであるが、對象そのものに全く没入するところの『對象にたいする自發的歸依』すなはちわれわれが靈感と稱すべきものはほとんど文學に現はれぬやうになり、偉大を愛するのではなくて偉大にたいする愛を愛するといふがごとく、きりもなしに自己を喰ひ盡すところの評論となりつゝある。かくて文學もまた『みづからの聲を聴かうとしてゐるのである。』さらに形而上學にいたつてはその性質上癒ゆることのない疾病で、たゞ快癒の階段と再發の階段とが交々相亞ぐのみである。前者を獨斷的、構成的、後者を懷疑的、探究的の形而上學と呼んでもよく、神學や宗教的宇宙開闢論のごときは前者に屬し、Pyrrho からヒュームおよびその無數の學徒にいたるすべての絶對懷疑說 Pyrrhonism は後者の例である。前者はむしろ詩といふべきで、後者が本來の形而上學である。そして現代が必然的に後者の時代であるといふことはわれわれの不運なのである。

變革に關するカーライルの『唯物的』思想はつぎのごとくである。——神意の大なる進路および人類に關する

その終局の目的については吾人はなんら、あるひは殆どなんら知ることができぬ。神秘はいたるところに吾人の周圍に吾人の裏に存在する。しかしながら人類がどこかしら或處へ前進しつゝあることだけは明らかとなつた。少くとも、すべて人生の事物は過去においても現在においても、また未來においても永久に運動し、變革せざるをえないものであるといふことが明かとなつた。『永遠の信條、永遠の政體などといふものによつて』猛烈に破壞的暴力をもつて、未來を過去のもとに縛し、深くして測りがたき神意にむかつて僭越にも『爾はこゝまでは來る可し、されどもはや一步も進むべからず』と命ぜんとしたことは古來幾度であつたかを知らぬ。『まつたく狂氣の沙汰である。』もしそれが成功するならば、それこそ人間にとつて最も恐ろしい呪縛であらう。PaganismはCatholicismに、TyrannyはMonarchyに、封建制度は代議政治に位をゆづらなければならぬ。しかしそれでやむのではないのである。實施の完成は意見の完全と等しく次第に近づきつゝあるが決して到達するといふことはない。眞理はシルラーの言葉を引用すれば、immer wind, nie ist. 常に生成すれども決して存在せず。

過去の崇拜者はそれが全く奪ひ去られたものとして歎きはしない。過去において價值ありしものは決して去るといふことなく、なほ現に存在して、認識されるにもせよ、されざるにもせよ、終局なき變革を貫いて生き且つ働くものである。『現在は今過去の生きたる總額である。』

『すべての紛糾と必然の大變革とはそれ自體はなほだしい害惡であるが、もしわれわれにしてよろしくこれを見るならば、たゞ古い方法がもはや處置しえざるにいたつたところの増大せる資源(increased resources)の結果ではないか……?』たとへば今日において往時の政治組織の繩目をばら／＼に破壊し、全歐洲を變革の恐怖をもつて混亂せしめつゝあるものもまた實に社會的資源の増大でなくして何であるか。そしてそれはもはや古い社會的

方法の處置しえざるものなのである。新らしい全能者たる蒸氣機關は有形の山とは似も似つかぬ他の山をばばらに伐り倒しつゝある。』もし従前の將帥がもはや指導者たりえずといふことなれば、これに代る新らしい者が尋ね求められなければならない。けれど困難は自然のなかにあるのでなくて方策のなかにあるのだから。

最後に『快癒』と『行爲』とについてカーライルは説く——形而上學の非生産的流行については随分悲憤を漏らしては來たが、實はそれらのなかに存する功益にたいしてなんらの洞察をもたぬわけではない。形而上學的推究は必然的害患なりとしても多くの善の先驅である。懷疑説の熱病はみづから燃えてその原因たる不淨を燒きはらひ、再び健康を恢復するであらう。いまや淺薄皮層なる意識的あるひは機械的の外面的領域において苦しげに悶へつゝある人生の原理も、やがて『神秘と奇蹟との深淵』すなはち『無意識の領土』へ會てなかりし深さにまで立ちかへり、そこで『創造的に働く』にいたるであらう。そして『その神秘なところから、それからのみひとり、すべての驚異、すべての藝文、宗教および社會制度は發したものである。』近世の形而上學がなんらの斷定をも齎さなかつたといふならば、それらは多くの否定を破壊したものであるといへるではないか。つまり一つの病が他の病を逐ひだしたのだ。懷疑の火が懷疑的のものを燒きつくして確定が再び光をうけて表面にあらはれる。これ獨逸人の形而上學が到達した階段である。そして『宗教にたいする一つの信仰が再び科學的精神にとつて可能にして避くべからざるものとなり、自由思想家といふ言葉は、もはや否定者あるひは屍屋にあらすして信仰者あるひは信ぜんとする者 (the Ready to believe) の意味となるのではないか。』まだ一般に認められるにいたらないが、獨逸文學のなかに新らしいその發現の徴候が見えるのである。

さらに他の方面においては功利主義、ラヂカリズムあるひは機械的哲學などといふものが、なほ將來長くなす

べき仕事を有することは認めるとしても、いまやわれわれはそれらを通しまたそれらを超えて先を見ることができる。頭のよい者は英吉利人すらもそれを見すて、他國にあつては四五十年前から見すてしまつてゐる。『人間が支配されてをり、あるひは支配されうるのはメカニズムによつてではなく、宗教によつて、自利によつてではなく忠誠によつてである。』

『人生の事物には神のごときもの (a Godlike) の存在するといふ永遠の事實、神はわれわれを造り且つ見てゐるといふにとゞまらず、われわれのなかにわれわれの周圍にあるといふこと、奇蹟の時代はつねにありしがごく今もあるといふことが、いたるところにおいて再び認められたるは著しきものである。』『メカニズムの守神は……飽くまでわれわれの魂の上に夢魔のごとく坐りこんではゐないで結局新しい魔法の道に古い呪文の解かれるとき、われわれの奴隸となり、心やすい精靈としてすべてわれわれの命令を果すであらう。夢見てゐるといふことを夢みる時は目ざめかゝつてゐるのである。』

われわれはこの地上にあつてあたかも異境に戦ふ戦士のごとくである。軍略のいかなるものなるかを理解せず、またその必要もなく、たゞわが手によつてなされねばならぬ當面のことをよく知るのみで足る。されば戦士のごとく『服従と勇氣と雄々しき歡び (a heroic joy) とをもつてこれを爲さしめよ。』『汝の手が見いだしたる爲すべきことはその何たるにもせよ、汝の全力をあげて之を爲せ。』 (Whatsoever thy hand findeth to do, do it with all thy might.) われわれの背後に、われわれの個々各々の背後に人間の努力と征服の六千年が横はり、また前方にはいまだ創造されず征服されずしかもわれわれが征服し創造すべき大洲と黄金郷との窮みなき未來が存するのである。

『苦痛、矛盾、誤謬はこの地上に全く絶えざる、しかも缺くべからざる存在を有する。労働は人間の世襲ではないか。そしていかなる労働が現在樂しくして憂苦ならざるものがあらう。労働と努力とは人間が愚かにも幸福と考ふところのかの安樂の邪魔である。しかも労働なくしては安樂もなく休息もない……。惡、われわれが惡と呼ぶものは人間の存在するかぎり存在する。われわれが與へうる最も廣き意味における惡は、人間の自由意志がよつてもつて秩序の建築と善とを創造すべき暗黒にして無秩序なる材料の謂ひなのである。』

以上、まことに不十分ながらトマス・カーライルの社會思想の最も本質的な部分を長短三つの述作を通して窺つてみたのである。近代思想としての自由主義・功利主義・個人主義等にたいする、かれの批判——一般に近代の合理主義思想にたいするかれの批判の根柢がいかなるものであるかの一斑は明かにされたかとおもふ。この思想がいかにドイツ文學から、——ことにゲーテから、力づけられてゐるか、またいかにラスキンに傳へられてゐるかは、文學思想的な問題である。だが、この思想が現代の合理主義ないし自由主義思想の批判として何を意味するかといふことの考察になれば、今日の課題である。(三八・三・二二)

一九三八年三月發行「研究論集」
（高岡高等商業學校研究會）第一〇卷 第四號 印刷